

サハリンにおけるコリアンディアスポラに関する 一考察

李 月 順

- 1、はじめに
- 2、サハリンのコリアンディアスポラとは
- 3、サハリン韓人の国籍と名前
- 4、サハリンの朝鮮民族学校
- 5、サハリンにおける朝鮮語教育の現状
- 6、おわりに

キーワード：ディアスポラ、サハリン韓人、
朝鮮民族学校、朝鮮語教育

1、はじめに

ロシア領サハリン州は、北海道の北部稚内から宗谷海峡を渡った島である。サハリン島は、千島列島とともに日本の検定地図には色が塗られていない。それは、サハリン島南部（南樺太）と千島列島は帰属未定地域と指定されているからであるという。日露戦争によるポーツマス条約（1905年）によりサハリン島南部は日本領となり、日本の敗戦まで南樺太と呼ばれ、ユジノサハリンスク（豊原）には、樺太庁¹が置かれていた。サハリン韓人²のディアスポラの背景には、日本の朝鮮半島植民地政策が大きくかか

わっている。サハリン韓人は、「サハリン棄民」ともよばれるが、それは戦後の国家間の政治的思惑のなかで翻弄され、忘れ去られ、取り残されてきた存在であったことによる。

1990年代、日本の戦争被害にあったアジアの人々に対する問題が取り上げられるようになったが、そうした問題の一つがサハリン韓人の問題であった。サハリン韓人が要請してきた第一の問題は、出身地である韓国への帰還を実現することであった。その後、1990年サハリン韓人1世の韓国への帰還が実現すると、次第に日本の社会では、サハリン韓人の問題が取り上げられることが少なくなった。

筆者は、2013年、2014年2回に渡り、サハリンを訪れる機会があった。そこで出会ったサハリン韓人は、ディアスポラとなったサハリン韓人の子孫である2世、3世であった。果たして、サハリン韓人の問題は、韓国への帰国問題だけを考えていいのだろうか。サハリン韓人の問題を調べていくと、日本の植民地政策という歴史的背景を同じくし、それぞれの地でディアスポ

¹ 現在のサハリン州立郷土博物館

² サハリン韓人以外にもサハリン残留朝鮮人、サハリン残留韓国・朝鮮人、サハリン朝鮮人、在サハリン朝鮮人などの名称が使われてきた。韓国におけるサハリン韓人の定義は、「満州事変以後、第二次世界大戦までの時期にサハリンへ強制連行されたもの配偶者および直系卑属」となっている。朴亨柱によると日本の敗戦後、サハリンには、先住朝鮮人（1940年～45年サハリンに居住する朝鮮人労働者および家族単位の家族

など）、北朝鮮派遣労働者、ソ連系朝鮮人（中央アジアからソ連移民と共にわたってきた朝鮮人）の3タイプのグループが存在したという。本稿におけるサハリン韓人とは、日本の植民地政策によってサハリンでディアスポラになったコリアン1世およびその子孫である先住朝鮮人のことである。サハリンのコリアンは、現在自らをサハリン韓人と呼んでいる。その背景として、韓国とソ連との国交樹立後、韓国との結びつきが強くなっていることがある。

ラとなった在日コリアンの問題と似ている点があることがわかった。例えば、日本の敗戦後、民族学校が開校され、民族教育が行われたことや国籍及び名前の問題では在日コリアンと同様の問題に直面してきたことがある。一方、ディアスポラとなった居住地により、民族学校の位置づけや経緯などはサハリン韓人のそれと在日コリアンでは違っている。

以上のような問題意識に立脚して、本稿では、ディアスポラとなったサハリン韓人の問題を民族教育と国籍及び名前の問題から明らかにしていきたい。そのことは、ディアスポラとなった在日コリアンの問題を再照射することにもつながる。

2、サハリンのコリアンディアスポラとは

サハリン州総人口498,973人中（2010年）、朝鮮人（であるとする帰属意識を持っている）の人口は、24,993人（総人口比5.3%）である。サハリンにはもともと古くから住んでいる「北方少数民族」（ニブヒ人、ウィルタ人、エブエンキ人、ナナイ人、オロチ人など）が存在していたが、1855年日露和親条約調印によって、択捉（エトロフ）以南が日本の管轄となり、1905年日露講和条約調印により南サハリン（南樺太）は、日本の領土となった。日本の陸海軍の基地がおかれ、ユジノサハリンスク（豊原）に樺太庁が設置された。そして、入植推進政策によって日本人がサハリンに移住するようになる。

1910年日韓併合により、朝鮮半島は、日本の植民地となった。朝鮮人は、約65万人が中国東北部（旧満州）へ、約20万人がシベリア・沿海州へ、約200万人が日本へとディアスポラとなった。1939年9月「朝鮮人労働者募集要項と朝鮮人労働者移住に関する事務取扱手続」が制定されたことによる日本から出稼ぎにきた家族単位の朝鮮人や、「募集」「官斡旋」「徴用」の形

態の強制連行による多くの朝鮮人が、サハリンの飛行場建設、鉄道敷設、炭鉱に駆り出された。

日本の敗戦時サハリンには約36万の日本人が居住していた。朝鮮人は、約2万3千人が強制連行や出稼ぎにきた朝鮮人労働者とその家族であり、日本人と同様引き揚げの対象であった。1946年ソ連地区引き揚げ米ソ協定締結が締結され、12月から1949年7月までに日本人は日本に帰国することができた。しかし、日本人と同様引き揚げ対象であるはずの朝鮮人は日本への渡航が許されず、サハリンに残留されたままとなり、そうしたことから「サハリン棄民」ともいわれた。サハリン韓人問題は、戦前の日本の植民地政策と戦後の米ソの冷戦構造や日本政府の無責任により放置されてきた歴史的・政治的状況によってひきおこされた問題である。実に、サハリン韓人1世が韓国に帰ることができるようになったのは、1989年韓国とソ連との国交樹立まで待たなければならなかった。

サハリンの朝鮮人がなぜ「棄民」となって取り残されたかについて、大沼（1992）は当時のソ連および、南朝鮮を統治していた米軍政府、そして、日本それぞれの政策が影響していたと次の様に指摘している。第一には、日本の敗戦後、サハリンの当事者となったソ連が引き上げに否定的な姿勢であったことがある。ソ連は、スターリンの独裁下にあったが、国土再建のために戦争で失われた労働力を補う必要があった。その労働力確保から、引き揚げに対するソ連の姿勢は否定的なものであったことが朝鮮人の引き上げに大きな妨げになった。第二に、占領軍であったアメリカにとって、戦後の日本と朝鮮の社会秩序の安定が至上命令であったが、サハリンにコリアンがいるという事実自体を十分認識していなかったことがある。サハリンのコリアンの帰還問題が最初に論じられたのは、1944年にサハリンから日本へと2重徴用され働いていた18人の朝鮮人炭鉱夫が、敗戦後、サハ

リンに居住する家族の帰還を請願したことがきっかけだった。また、当時南朝鮮米軍政府は、深刻な経済情勢を理由に、朝鮮人の帰還受け入れに消極的だったことがある。第三に、引き揚げは、連合国の責任の下に遂行されたが、その情報は、日本政府の提供する情報を基に具体的な引き揚げ政策が行われた。その日本政府はというと、引き揚げの対象は血統的な日本人であり、当時の日本の帝国臣民であった朝鮮人や台湾人は念頭になかったことがある。日本政府は、日本人の引き揚げには積極的に働きかけ、在サハリン日本人は、日本への帰国が可能になった。この時、朝鮮人及び朝鮮人と結婚した日本人配偶者と子どもは帰国を許されなかった。このようなことから「労働力としてサハリンに送り込むことには全力を尽くした日本政府も企業も、彼らを故郷に送り帰すことにはひとかけらの関心も示さなかった」³日本の姿勢が、サハリン韓人の問題を生み出すことになった。すなわち、東西冷戦と日本の戦後処理が未解決のまま植民地支配の責任及び戦争責任が回避されたことによりサハリン韓人は、ディアスポラの状況におかれ「サハリン棄民」となったのである。

その後、日本への引き揚げから排除されていた朝鮮人及び朝鮮人と結婚した日本人配偶者とその子どもは、日本への帰国が可能になった。1956年日ソ共同宣言でソ連と日本の国交回復後、ソ連に抑留されていた日本人の釈放と日本への送還が決定された。それに伴い、サハリンにいた日本人妻とその家族については、日本へ帰還できるようになった。1957年から59年まで、2345人が日本に引き揚げた。この引揚者について「日本人引揚者766人に対し、外国籍の者は1541人で外国籍の者が圧倒的に多くなっている。これら外国籍の者は日本婦人の同伴する朝

鮮人の夫とその子ども」⁴であったという。この時日本に引き揚げてきた朴魯学、李義八などが中心となって「樺太抑留帰還者同盟」（後、樺太帰還在日韓国人会に変更）を結成し、サハリン韓人の帰国の実現に向けて日本政府や国会に働きかけを行った。李は当時のことを次のように述べている⁵。

46年の12月から日本人が引き揚げられるようになったけど、大泊では日本人の引き上げも遅かった。しばらく中断があって、49年ごろに日本人は全員引き揚げたと思う。最初は日本人より朝鮮人が先に引き揚げられると思ったのに、日本人がどんどん引き揚げて行っても、朝鮮人には誰一人として引き揚げの通知が来ないんだよ。来月には来るだろう、来年には来るだろうと我慢して待っていたよ。日本人がすべて引き揚げたら今度は朝鮮人の番だろうと思っていたのに。それが現状なんだよ。

最初は、日本が必要だからといって、内鮮一体とか皇国臣民とかいいながら連れて行ったのに、敗戦後は日本人だけ引き揚げさせて、使うだけこき使ってから、戦争が終わるとお前たちは日本人ではないからと、自分たちだけ引き揚げて行った。中には賄賂を使って朝鮮人が日本人に成りすまして乗船したのに、後から密告されて船から下ろされたり、行方が分からなくなったりしたものもいたよ。妻と結婚したのが1950年。日本人と結婚したおかげで私は日本に引き揚げることができた。…樺太から出るとき、残った人の希望を託されたから、その人たちのことをほったらかしにすることはできなかった。何か彼らのために運動するつもりだった。…こっちに来て会を作って、韓国や日本、国際赤十字社に嘆願書を送って、サハリンにも手紙を書いた。すると向こうからこちらへ、情報や家族の消息を尋ねて、みんなが手紙を出すようになり、それがどんどん増えて毎日3、40通になった。それに返事をし

³ 大沼保昭『サハリン棄民』中公新書、1992年、18頁。

⁴ 厚生省援護局編集『引き揚げと援護30年の歩み』1987年

⁵ 小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』集英社新書、2008年、159頁。

なければならぬし、韓国の家族に送ってくれという手紙も送られてくる。

1965年日韓基本条約締結に伴い、日本と韓国との間で国交が樹立した。戦後補償の問題が取り上げられたが、サハリン韓人は、請求権協定の対象外とされた。朴魯学たちは、サハリンの家族と韓国の家族との間の郵便の橋渡しをしながら、帰還希望者の名簿⁶を作成し、韓国政府に提出した。その名簿は、帰還希望者の具体的な資料となり、各政府間への働きかけを促すものとなった。1975年原告4名による「日本に帰還できる地位の確認」を求める樺太残留者帰還請求訴訟（いわゆるサハリン裁判、1988年取り下げ）を東京地裁に提訴した。当時、韓国とソ連とは国交が樹立しておらず、直接サハリンから韓国の親族に会いに行くという事はできなかった。そのため、韓国とソ連とそれぞれ国交を樹立していた日本を経由する必要があった。これまで日本政府は渡航証明書の発給及び申請書受理については消極的姿勢であったが、1976年日本政府は発給及び受理の方針を決定した。

1987年日本の議員の中で党派を超えたサハリン残留韓国・朝鮮人問題議員懇談会が発足し、1989年日本と韓国の赤十字社による「在サハリン韓国人支援共同事業体」が発足した。この事業体を中心となり、①一時帰国支援事業②永住韓国支援事業③サハリン残留支援事業などの活動が行われた。一時帰国支援事業により、約1万6000人のサハリン韓人が韓国への一時訪問をはたした。1995年永住帰国支援事業として、韓国の仁川市に高齢者のための療養院が建てられた。2000年安山市（ソウル郊外、アンサン市）に永住帰国者のためのアパートが建設された。そして、サハリン残留支援事業として、2006年ユジノサハリンスクにサハリン韓国文化センタ

ーが建設された。韓人会、老人会、離散家族会の事務所がその中にあり、サハリン韓人の活動の拠点となっている。

そして、2001年永住帰国者のサハリン渡航支援事業が開始されたが、その対象者は、日本の敗戦（1945年8月15日）以前からサハリンに居住していたサハリン韓人1世代とその配偶者および障害者の子どもに限定された。その後、1945年8月15日以前にサハリンに移住、またはサハリンで出生したものに限定された。1945年8月15日以前とそれ以後という日時の線引きにより、きょうだいの間で永住帰国対象者に該当するものと該当しないものを生み出した。このことは家族の中で新たなディアスポラの状況を生み出したのである。

3、サハリン韓人の国籍と名前

筆者は、サハリンで出会ったサハリン韓人2世、3世から話を聞く中で民族名とロシア名を持っていることがわかった。サハリン韓人には、多くの在日コリアン同様二つの名前を持っていることがあることに気づいた。その場合、学校や職場など公的な名前は、民族名の姓とロシア的な名前からなる姓名を使用している。民族名の名前とは、ロシア的な名前ではなく、朝鮮名のことである。例えば、日本語の通訳をしてくれた当時大学生であったサハリン韓人3世の女性（1990年生まれ）は、ロシア社会で使っている公的な名前であるアンナとは別に、栄姫（ヨンヒ）という朝鮮名をもっている。このことからサハリン韓人の親は、子どもにロシア名だけでなく朝鮮名を付けたことがわかる。サハリン韓人2世、3世の場合、アンナのようにロシア人にとって呼びやすいロシア的な名前は、パスポートなど公的な名前として日常

⁶ 1967年7月約7000名。内訳は韓国永住希望者1410世帯5348名、日本永住希望者334世帯1576名、合計1744世

帯6923名。大沼前掲書、75頁。

生活で使われる主要な名前である。朝鮮名は親族間やサハリン韓人社会の間で名のる名前ではない。

ソ連の建築の会社で責任者をしていた李起正氏（サハリン韓人2世）は、ロシア名を使うようになったいきさつについて次のように述べている。⁷

責任者になると、部長と部課長になると、ロシアの名前がないとだめだと、アレクセイ・ミハイロビッチ・アリョーシャ。それはね、マカロフにいた時は、ロシア人につけられたのは、コーリャだったんですよ。そして、大泊で移った時に、兄さんも2男の兄さんもコーリャだったんですよ、都合が悪いということで、お前の名前を変えれと。それで兄さんがそこに住んでいて、自分はみんなコーリャってわかっているから、名前を変えてほしいと。そして、今度、現場ですわね。掃除婦が、ロシアの女がいたんですよ。名前を付けたいんだけど、こういう名前はどうかって、僕に言うんですよ。今はニコライだけど、変えてくれて言ったら、彼女が、ママ、アリョーシャがいいって。…銀行の書類なんて、部長課長の僕たちのサインがないと通らないんです。そういう意味で、ロシアのサインを使うようになったんです。

サハリンでの生活を余儀なくされる中で、ロシア社会で通用するロシア名を使わざるを得ない状況が生まれていったことがわかる。サハリン韓人1世と2世の中には、朝鮮名とロシア名だけでなく、日本名で呼ばれていた経験をもっ

ている場合がある。日本名で呼ばれていた経験をもっているサハリン韓人は、日本の植民地政策の一つとして1939年創氏改名政策が施行⁸されたことにより、日本名を使っていたのである。

ところで、在日コリアンの多くは、本名（民族名）と通名⁹（日本名）という二つの名前を持っており、日常生活では本名（民族名）ではなく通名（日本名）を使用している場合が多い。在日コリアンが通名を使用するようになった背景には、サハリン韓人と同様、創氏改名政策がかかわっている。

サハリン韓人1世2世の多くが在日コリアン同様、創氏改名政策により、日本統治にあったサハリン（南樺太）で日本名を使うようになり、呼ばれていくのである。サハリン韓人にとって朝鮮名は、「樺太日本人社会が解体し、その後に到来したソ連社会の中で用いられるようになったものだという印象」を持つ名前であったという。日本の敗戦後、朝鮮名を公式に使えるようになったものの、前述した李起正氏のように「組織の要職にあった者はロシア名を使う必要に迫られた」¹⁰のである。

そして、植民地統治下で呼ばれていた日本名は、その後、サハリン韓人1世と2世の生活に関わって影響し、複雑な問題を生じさせた。その一つが、ソ連社会でパスポート（身分証明書）や年金支給の手続きなどで重要な労働手帳¹¹の名前の記載と本名である民族名の記載のちがいが生じ、本人であることを証明することが困難な問題を生み出したのである。朴享柱（1990）

⁷ 今西一『サハリン・樺太の朝鮮人―安山市「故郷の村」でのインタビュー』小樽商科大学、2014年。http://hdl.handle.net/10252/5338。李起正氏インタビュー。

⁸ 1939年 政令第20号「朝鮮人の姓名に関する件」。1940年2月10日から約6か月間実施された。前半3か月の改名率が7.6%であったのに対し、結果全人口の79%が改名したことから、かなり強引な政策の施行が行われたということがわかる。金英達『創氏改名の法制度と歴史』明石書店、2002年。水野直樹『創氏改名』岩波新書、2008年参照。

⁹ 日本社会で通じる名前。印鑑登録や自動車運転免許など公的な証明書で認められている。

¹⁰ 中山大将「韓国永住帰国サハリン朝鮮人―韓国安山市「故郷の村」の韓人」『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』小樽商科大学出版会、2012年。229頁。

¹¹ 労働手帳とは、サハリンで暮らすうえで日常生活に必携のものであり、労働経歴が詳細に記載される。年金受領の資格や該当期間、企業所指導部からの奨励の記録などが記載される。

によると、労働手帳とパスポートの姓名は同じでなければならないが、サハリン韓人1世の中で、「正確に朝鮮名を記入したケースは僅少だった」という。それは、戦後もサハリン韓人1世の姓名は日本姓で呼ばれていたことからその日本姓がそのままパスポートに記載されたことや、朝鮮名の漢字を日本式に読んで記載されたことが原因であった。労働手帳に、日本姓だったり、日本式発音の姓が記載された場合もあった。このことが後に、名前の誤記載につながり、パスポートや年金支給の手続きにあたって、「いうにえない苦労が生じること」になったという。姓名の差異を改正するには、証人3名をたてて訴訟を起こすしか手立てがなく、それができず年金を断念するケースもあったという。当時のサハリン韓人1世の「念頭には「帰国」の夢がこびりついていたので、このパスポート（身分証明書）と労働手帳の姓名の差異などに無関心」¹²だったこともある。確かに、「帰国」を考えていた多くのサハリン韓人にとってみれば、サハリンでの生活を余儀なくされるといった認識はなく、日本名や日本式読みは、日本の植民地下において呼ばれ／名のらされてきた名前であり、便宜上の一時的な姓名であった。ある意味、日本名や日本式読みの問題は、サハリン韓人1世が戦前と戦後の連続した状態にあったことをあらわしている。姓名の改正の訴訟では、事実を証明することが証人に求められ、姓名改正のハードルは高かった。問題にされるべきは、サハリン韓人1世の「無関心」ではなく、サハリン「棄民」を生み出した日本の植民地政策に対する清算と責任が放置されたことにあるといえるだろう。

サハリン韓人の姓名の問題は、1950年代後期

から60年代初期にかけて、ソ連国籍や朝鮮公民権（朝鮮民主主義人民共和国国籍）の取得を考えるサハリン韓人にとって、パスポートに正確な朝鮮名記載の問題と関わってくる問題であった。

サハリン韓人の国籍については、3つのケースが見られた。それは、①ソ連国籍取得②朝鮮民主主義人民共和国国籍取得③無国籍のケースである。無国籍のケースは、さらに、日本の植民地下で日本国籍であったサハリン韓人がそのまま無国籍（旧日本国籍と記載）になる場合と朝鮮民主主義人民共和国国籍を取得後、1970年代にみられた朝鮮民主主義人民共和国国籍からの離脱に伴う無国籍（朝鮮国籍と記載）になる場合があった。後者の無国籍者の場合については、「ソ連国籍の取得を意図していた」¹³という。サハリン韓人1世は、故郷である韓国への帰国を念頭に置いていたものが多く、①②の国籍を取得すると帰国が難しくなると考え、無国籍を選択するものが多かった。

ソ連では、1952年朝鮮人のソ連国籍編入手続きの簡素化に関するソ連邦閣僚会議を決定し、それに基づきソ連国籍取得手続きの宣伝活動を開始した。1958年7月25日「サハリン州在住朝鮮民族の無国籍について」採択し、ソ連国籍取得を促した。そして、1978年新ソ連国籍法発効に伴い、1979年7月1日以降ソ連領内で生まれた無国籍者の子どもは、自動的にソ連国籍が付与されるようになった。（ただし、1979年7月以前の子どもには適応されなかった。）¹⁴

朴は、「ソ連当局の朝鮮人社会に対する差別待遇は1986、7年頃まで」続いたという。それは、無国籍・朝鮮国籍者やその子どもに生活のあらゆる面で影響したという。

¹² 朴享柱『サハリンからのレポート』御茶ノ水書房、1990年。103～104頁

¹³ 朴前掲書、71頁。

¹⁴ デイン・ユリア「アイデンティティを求めてーサハリ

ン朝鮮人の戦後、1945～1989年」『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』小樽商科大学出版会、2012年。150頁。

無国籍・朝鮮国籍の子弟には共産主義青年同盟への加盟資格が与えられなかったことがそうである。こうした子弟は、就職の際にも、職員に欠員があるときでさえ、雇用を拒否されることがしばしばあった。…人材を雇用するにはまずパスポートを検査し、朝鮮国籍・無国籍の朝鮮人の場合は販売・事務系統・物質担当責任者には決して採用しないこと、現在すでに採用している販売人に対しては、何らかの方法で解雇できるよう意を尽くすようにというのである。一時、地方の百貨店に勤めていた朝鮮人女性が、あれこれ理由を付けられて、解雇されたり、他の職場に回されたりしたことがあった。¹⁵

故郷への帰国のため、無国籍のままであったサハリン韓人の中に、ソ連国籍を取得するものが出てきた。ソ連国籍を取得する理由として、朴（1990）は次のように述べている。第一に、子どもの教育問題の具体的な解決手段であったということである。無国籍・朝鮮国籍の場合、進学できる高等学校・大学は極めて限られていたという。第二に、旅行や移動の不便な問題から解決されることがある。無国籍・朝鮮国籍の場合、すべての行動が制限され、申請後許可を得なければならず、書類の不備等により旅行禁止の処分を受けることもあったという。第三に、ソ連国籍を取得しておけば、ソ連と韓国が国交樹立した後、韓国を訪問し、家族と再会できるかもしれない可能性に期待を持ったからだという。

ところで、旧宗主国である日本でディアスポラとなった在日コリアンの国籍に関しては、日本の敗戦後1951年サンフランシスコ講和条約発効前の4月19日民事局長通達「平和条約の発効

に伴う朝鮮人、台湾人等に関する国籍及び戸籍事務の処理について」による日本国籍「剥奪」まで、日本国籍を有するとされていた。しかし、1947年「外国人登録令」公布で「当分ノ間、之ヲ外国人トミナス」という規定が入れられ、日本人と区別する「朝鮮」という記号で記載され、外国人として管理の対象とされた。1948年大韓民国が樹立すると韓国籍を選択する在日コリアンがでてきた。こうして、在日コリアンは、外国人登録の国籍欄には韓国（国籍）あるいは朝鮮（記号）と記載されるようになる。この場合、朝鮮という記号は、国籍上は無国籍を意味し、ディアスポラとなった歴史的経緯は同じでありながら、在日コリアンは国籍によってダブルスタンダードの扱いがされるのである¹⁶。現在まで、帰化や国籍結婚などによる日本国籍取得者も増加しており、在日コリアンの国籍は、大きくは韓国籍、朝鮮籍（無国籍）、日本籍となっている。

そして、在日外国人として処遇された在日コリアンは、日本の1979年国際人権規約批准や1981年難民条約批准によって国内法が改正されるまで、国籍条項によって年金や児童手当、日本育英会による奨学金の受給、公共住宅の入居など生活するうえで保障されるべき権利から除外されてきた。また、「公権力の行使または公の意思の形成への参画に携わる職員になるには日本国籍を有する」という「当然の法理」によって、地方公務員の門戸が閉ざされ、民間では就職差別が横行するなど、1970年代に民族差別が社会問題として浮上し、差別の是正に取り組まれていくまで、民族差別が存在した。戦前、戦後と連続する厳しい民族差別を回避する一つ

¹⁵ 朴前掲書、70頁。

¹⁶ 例えば、日韓条約締結後、在留資格の扱いに韓国籍と朝鮮籍との間で差が生じた。1965年6月に締結された在日韓国人の法的地位に関する協定実施のために制定された「出入国管理特別法」が定める永住（協定永住）が認められた。韓国籍には協定永住が認められたが、

朝鮮籍は除外された。その後、1981年日本の難民条約批准を機に「入管令」が「入管法」に改定されたとき、特例により申請すれば無条件に永住を許可することにした（特例永住）。1991年5月「出入国管理に関する特例法」の公布により、協定永住・特例永住を「特別永住者」という地位に一本化した。

の方法が、通名（日本名）を使って生活することであった。名前の問題について、個人的な選択一本名（民族名）を名のるか通名（日本名）を名のるか一であり、在日コリアンひとりに自己責任が課せられるが、その背景にある創氏改名政策の連続性と民族差別の問題を放置してきた日本社会の在り方が問われなければならないだろう。

以上のことから、サハリン韓人の国籍問題と名前の問題をみると、在日コリアンのそれと共通する点がみられた。しかし、サハリン韓人について「社会的障壁は、「朝鮮民族」であるということよりも、「無国籍」に由来するものが多かった」¹⁷のにたいし、在日コリアンのそれは、「朝鮮民族（人）」であること（本名（民族名）使用による差別）と外国籍（国籍条項による権利の制限や排除）に由来することが多かった点で差異がみられる。

4、サハリンの朝鮮民族学校

サハリン韓人の子どもは、日本の統治からソ連の統治に移行する中で、早い段階で組織された朝鮮民族学校で教育を受けた。朝鮮民族学校は、1946年から47年にかけて開校されていたが、その背景には、「個別的愛民主義」に基づくスターリンの民族政策があった。天野尚樹（2012）によると、ロシア帝国からソ連に継承されたこの民族政策は、「ロシア人以外の民族の民族らしい形式を積極的に整えることで、分離主義的なナショナリズムを発露させるためのはけ口を設けること」にあったという。この場合、民族らしい形式とは、「民族領土、民族語、民族エリート、民族文化を意味」するが、あく

まで「ソビエト国家の枠内と矛盾しない範囲で整備することが基本方針」¹⁸であった。

サハリン韓人の子どもたちは、朝鮮民族学校ではじめて朝鮮語を学ぶことになった。日本の統治下では、サハリン韓人の子どもたちは、家庭で朝鮮語が話されることはあっても、日本の学校で学ぶ学習言語は日本語であった。韓国に永住帰国したサハリン1世が日本語を話せるのは日本の統治下であるサハリン（南樺太）で生活し、日本の学校教育を受けていた経験を持つからである。故郷への「帰国」を夢見ていたサハリン韓人1世が、日本語しか話せない子どもに、帰国後必要となる朝鮮語を学ぶことができる朝鮮民族学校で学ばせるのは自然なことでもあった。朝鮮民族学校は、帰国の希望を持ちながら、帰国に備え、朝鮮人の子どもたちに朝鮮語を習得させる教育の場として受け止められていたと考えられる。朴（1990）によると、その理由として、①戦前から居住していた朝鮮人の子どもの主要な言語は日本語であり、朝鮮語を母語とする子どもが多くなかったこと②戦前の教育機関は日本の学校しかなく、朝鮮語を学ぶ教育機関は存在しなかったこと③早い時期に学校が設立されたのは帰国を待つ間の朝鮮語を学ぶ学校が必要であったことを挙げている。一方、戦後に移住してきたソ連系朝鮮人（高麗人）の子どもは、ソ連の学校に通っていた。

そして、サハリン韓人社会に「朝鮮人たちを合法的に擁護し、朝鮮民族の伝統や文化を継承維持する社会組織が存在しなかった」¹⁹中で、朝鮮民族学校がその役割を担うようになる。当初、ソ連当局は、朝鮮民族学校の児童生徒が民族的な文化活動をすることにに対し寛容であったが、1950年代後半フルシチョフ政権になると朝

¹⁷ 中山大将「サハリン韓人の下からの共生の模索—樺太・サハリン・韓国を生きた樺太移住韓人二世代を中心に—」『境界研究』No.5、2015年。18頁。

¹⁸ 天野尚樹「個別的愛民主義の帝国—戦後ソ連のサハリ

ン朝鮮人統治1945～1949年」『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』小樽商科大学出版会、2012年。132頁。

¹⁹ 朴前掲書、59頁。

鮮人の民族的な行事に対するソ連行政機関の対応は次第に冷ややかになり、ブレジネフ政権になると一切禁止され、その後民族学校は閉鎖されていった。

7年制の朝鮮民族学校が各市町に開校され、中学校を併設した10年制の朝鮮民族学校が、ユジノサハリンスク市、ポロナイスク市、チェホフ市など数か所設置された。サハリン韓人の子どもたちは、居住地域の学区制に基づいてそれぞれの朝鮮民族学校に通学した。朝鮮民族学校では、朝鮮語や算数、物理などの自然科学の科目も教えられたが、ソ連の教科書を朝鮮語に訳したものが使用された。

教師はというと当初、朝鮮民族学校では、朝鮮語を知っているサハリン韓人が教えていた。例えば、金慶鎮氏²⁰（1934年生まれ、2000年永住帰国）の父親は、当時住んでいた恵須取（エストル）ホロキシにある港建設で働いていたが、朝鮮語を知っているという理由で朝鮮民族学校の教師になることを地域のサハリン韓人住民から要請され、校長を務めたという。

戦争が終わって、教師はいませんでした。ほくのアボジは、ハングルを知っていたんですね。住民たちに頼まれて校長先生として、小学校の校長先生として。エストルのホロキシですけども、朝鮮人は少なかったんです。教師は3人しかいませんでした。生徒は40人位かな。年は関係ないかな。みんな1年生。教科書も何もなかったんで、先生たちが作って。…朝鮮人は政治的に遅れていて（ソ連は朝鮮人は政治的に遅れていると考え）、タシケントやカザフスタンから来た共産党員（朝鮮人）が校長先生で、その人から学ぶようになりました。

朝鮮民族学校が開校されたものの、教師が不足していたことや朝鮮語を教えることができる人材が少なかった。その後、サハリン韓人教師に代わり、移住してきたソ連系朝鮮人²¹教師が管理職として赴任するなど、徐々にソ連系朝鮮人教師がとってかわるようになる。その理由として、ソ連系朝鮮人は、ソ連の社会科学の基礎を理解し、ロシア語を堪能に話す教員であるのに対し、サハリン韓人教師は、①教員としての知識水準がソ連系朝鮮人に比して低いと考えられていたこと②何よりも戦前日帝時代から居住していたことから日本の精神を有する思想的に危険分子とみなされたこと③ソ連の社会主義に基づく社会建設を担う2世教育に適さない教員であるとみなされたからである。例えば、親日派の父親を持っていたというレッテルを張られた朝鮮人教師は、学校からそうした理由で追放されたり、ソ連系朝鮮人が校長に赴任すると辞めさせられたりしたこともあったという。²²朝鮮民族学校は、ソ連社会への適応を促す教育機関の性格も併せ持っていたが、その役割をソ連系朝鮮人教師が担っていたのである。ソ連系朝鮮人の役割のひとつが、朝鮮民族学校での教育を通じて、「ソ連化」（ソ連社会への同化）をはかる目的を遂行することにあった。朝鮮民族学校は、単にソ連の民族政策に基づいて開校されただけでなく、学校教育を通じて、「ソ連化」を推進する重要な役割があり、ソ連系朝鮮人教師がその役割を担っていたのである。一方、サハリン韓人は、教師不足の解消と資質向上に向けて、1950年代初期に、朝鮮師範学校を設立し教員養成に取り組んだ。中頃には、朝鮮語学科出身の教師を輩出することができ、朝鮮民族学

²⁰ 2015年3月27日韓国安山市にてインタビュー

²¹ 高麗人と自称しているカレイスキー（朝鮮人）のこと。元は、沿海州に約20万人居住していたが、1935年最初の中央アジア（カザフスタン、ウズベキスタン）への強制移住が行われ、第二次大戦中にかけて強制移住が行われた。戦後、ソ連の統治になったサハリンへソ連

人移民と共に渡ってきた。多くがソ連共産党員であり、ロシア語が堪能であった。サハリンの市町村の行政、司法部門、企業所、工場、漁業コンビナート、炭鉱、新聞社、朝鮮民族学校などで働いた。

²² 朴前掲書、32頁。

校で働くようになっていた。1960年代初期になるとサハリン韓人のソ連社会での適応が進んだこともあって、教師をはじめとするソ連系朝鮮人の役割は減少していった。

ブレジネフ政権になり、朝鮮民族学校は、1964年から65年にかけて閉校されていった。1960年代中ソ論争が起こったが、朝鮮民主主義人民共和国が中国側についたことがあった。のちに、朝鮮民族学校は閉校となり、ソ連への「同化」が推進されていったという。²³サハリン韓人にとっても朝鮮民族学校の閉校は冷静に受け止められた。それは、朝鮮民族学校修了後の進路が困難であったからである。朝鮮民族学校は、中等教育までの学校しかなく、高等教育をうけることができる高校や大学が極めて限られていた。また、朝鮮民族学校でのロシア語教育は、十分に行われていたわけではなく、高校の試験を受けても合格しないこともあった。さらに、故郷への「帰国」が難しい状況は変わらず、サハリン韓人は、サハリンで生きていくためには、ロシア語の習得が必要である現実と直面していたことがある。あるサハリン韓人2世は朝鮮民族学校を卒業してもソ連の社会で生きていくことが難しいことを次の様に述べている。

朝鮮学校は命令で廃校になりました。なぜかっていうと、教科書が全部朝鮮語なんです、内容が全部朝鮮語、そういう人間は、ソ連の社会では、活動することができないんですよ。²⁴

また、もうひとりのサハリン韓人2世は、言葉の問題で苦労したことを次のように述べている。

私が（朝鮮民族学校を）七年生で終わった時には、

その上の学校はなかったです。朝鮮語の勉強するところは。それで、七年生おわって、ロシア学校七年生にあがったんですよ。それで、全然もう言葉が通じなくて、勉強できなくて、ひとつの学校に行ったら、断られたことがありましたね。六年生か五年生に行きなさいと。数学は円、数学は朝鮮学校で勉強して、当たり前勉強して、数学好きで、数学はロシア語でもわかったんですけど、ただ、ロシア語ですね。…日本の辞典で勉強して、ようやく七年生終わって、終わって、八年生、九年生、中学に入るようになって、ロシア学校ですね。…ロシア学校で勉強しているときはもう、本当に難しかったですよ。言葉っていうのは、その時にわかっていたのは、日本語だけで、ロシア語も全然だめだったし、韓国語も、うちではね、うちではまだそのときは、日本語しか使っていないくて、親たちは韓国語も言いましたけど、私は日本語。お父さんたちも日本語でしたからね。²⁵

サハリン韓人が家庭で話す言葉は、日本語や朝鮮語であった。サハリン韓人2世は、父母の話す朝鮮語を聞くことはできたが、朝鮮語の習得は朝鮮民族学校で学ぶようになってからである。サハリン韓人2世の中には日本語、朝鮮語、ロシア語を話すことができる場合がある。それは、日本の統治下で教育を受けた経験があることを表している。朝鮮民族学校で朝鮮語を学んだサハリン韓人2世にとって、ロシア語がソ連社会で生きていくための主要な言語である。さらに、民族学校の閉鎖後、ソ連の学校で学ぶようになり、ソ連社会への適応が進むにつれ、サハリン韓人は、ソ連国籍を取得していくようになった。

筆者は、2013年に初めてサハリンを訪れ、サハリン韓人の方から話を聞く機会があった。例

²³ 今西 一「樺太・サハリンの朝鮮人」『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』小樽商科大学出版会、2012年。47頁。

²⁴ 李世鎮氏聞き取り。『北東アジアのコリアン・ディア

スポラ』前掲書。262頁。

²⁵ 高昌男氏聞き取り。『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』前掲書、270頁。

えば、日本語とロシア語の通訳をしてくれたマヌニ氏は、朝鮮民族学校に在籍した経験を持つ。マヌニ氏は、1949年ユジノサハリンスクで生まれたサハリン韓人2世である。マヌニ氏の父親は、1907年慶尚南道で生まれ、18歳の時サハリンへ徴用され、シネゴルスク（カワカミ炭鉱）で炭鉱夫として働いていた。日本の敗戦後、父親は水道管の工事職人として働いた。マヌニ氏は、1957年朝鮮民族学校に入学し、1963年閉鎖されるまで通っていた。そして、閉鎖後1年間ソ連の学校で学んだ経験を持っている。マヌニ氏の話によると、朝鮮民族学校の教師は、カザフスタンなどから派遣されてきたソ連系朝鮮人であったという。教科書は、タシケントから送られてきていた。授業は、朝鮮語の授業以外は、ロシア語の教科書を使って、ロシア語で授業をしていたという。ロシアの歴史や世界の歴史、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の歴史が教えられた。1クラス30人で、4クラス（1年、2年時の記憶）あったという。

5、サハリンにおける朝鮮語教育の現状

朝鮮民族学校が閉鎖されてから、朝鮮語教育が復活したのは、1987年以後でのことである。公立の初中等学校の中で朝鮮語の授業を始める学校が現れた。山本将文（1990）の写真集には、ユジノサハリンスク中等学校2年生が朝鮮語の授業を受けている様子が写っている。この中学校では、1988年に朝鮮語の授業が始まった。朝鮮語を学びたい生徒を対象にしており、サハリン韓人の生徒よりロシア人の生徒の方が多い。朝鮮語の教師がいなかったことから、サハリンの朝鮮語新聞『レーニンの道へ』の記者（サハリン師範大学朝鮮語科を卒業）が授業をしている様子が映し出されている。

現在、サハリンにおける朝鮮語教育の現状の一端について、サハリン韓人2世、3世の話か

らわかったことは、サハリンの公立の学校の中には、韓国語教育が行われている学校があることや韓国語教室という形態で韓国語の教育が行われていることである。前述した日本語通訳のサハリン韓人3世のアンナは、15歳～18歳にかけてサハリン市立第6学校にある韓国語センターに放課後通っていた経験がある。その後、サハリン文化センターに通い、韓国語を勉強した。アンナには、2000年永住帰国した祖父母がおり、その祖父母と話をしたいという目的で韓国語を勉強し始めたという。また、パク（サハリン韓人2世、コルサコフに居住）氏の話によると、公立イホ学校で師範科卒の教員二人による韓国語の授業が1日一時間行われており、夜には韓国語教室が開かれているという。その他、ユジノサハリンスク市第9号学校では、正規科目として韓国語の授業が行われている。サハリン総合大学には、韓国語専攻学科が開設されている。

そして、2006年日本の財政支援と韓国・ロシア政府及び赤十字社の協力で建てられたサハリン韓国文化センターには、サハリン韓国教育院があり、韓国語教室などを開催している。韓国教育院の院長は、韓国文教部（日本の文科省に相当）から派遣されている。その院長の話によると、韓国語を学びにくる学生の目的は、①韓国に永住帰国した祖父母と話をしたい②韓国の大学に留学希望があるということであり、学生の中には、ロシア人の学生もいるという。夏休みに韓国訪問のプログラムがあり、毎年約80名の学生が参加している。それ以外に、ボルナイスクの少数民族博物館館長であるイ（サハリン韓人2世）氏のように、自ら韓国語を学び、1993年から教えているといったケースもある。

6、おわりに

本稿では、以上のように、サハリン韓人のディアスポラの背景および、戦後の朝鮮民族学校の歴史と朝鮮語教育の現状の一端を明らかにした。サハリン韓人のディアスポラの背景には、日本の植民地支配と戦後の国際政治状況が深くかかわっていたことがあり、韓ソの国交樹立後、1990年から韓国への永住帰国が可能になったが、同時に家族の中で新たなディアスポラの状況を作り出していることがわかった。そして、サハリン韓人の名前と国籍の問題を通して、日本の統治とソ連の統治にまたがってディアスポラとなったサハリン韓人が直面せざるを得なかった問題を明らかにした。サハリン韓人のこのような状況は、同じディアスポラとなった在日コリアンが直面せざるを得なかった問題と共通する点があるものの差異もあった。

ところで、1990年韓国とソ連の国交樹立後、サハリン韓人は韓国との関係をそれ以前にも増して強めていった。一つには、サハリン韓人の故郷の多くが、韓国にあったこと、もう一つには、ソウルオリンピック後、目にする韓国は経済的にも発展していると映ったことがある。1989年韓国国会会議で「大韓民国国会はソ連及び日本政府と国民にサハリン同胞問題解決にあらゆる誠意を尽くすことを訴える」といった決議がされたことや、1989年日韓赤十字社による「在サハリン韓人共同支援事業体」が設立され、韓国への一時訪問や永住帰国事業が開始されたことなどがあり、次第に韓国との関係が強くなっていった。

サハリン韓人2世に関して、韓国への永住帰

国者の対象基準を1945年8月15日以前に出生したものに限ったことから、家族の間で新たなディアスポラを生み出していることは前述した。この問題には、永住帰国者以外のサハリン韓人の国籍問題が関わっている。韓国政府は、永住帰国者には、ロシア国籍と韓国籍の2重国籍を認めているが、それ以外のサハリン韓人には、2重国籍を認めていない。そのため永住帰国対象者にならなかったサハリン韓人は、永住帰国者と同等の国籍回復を求めて活動をしている。

現在、サハリン韓人の活動の拠点になっているのは、ユジノサハリンスクにあるサハリン韓国文化センターである。サハリン韓国文化センターは、2006年サハリン残留支援事業として日本政府の資金援助により建設された。建設に至る経緯には、2005年日韓首脳会談（盧武鉉大統領と小泉首相）でサハリン残留韓人・強制徴用者の遺骨返還などについて合意がされたことがある。サハリン韓人の問題は、永住帰国が実現したことで解決済みであるかのようにとらえられてきたが、未だ植民地支配の未精算の問題が残されている。そのひとつが2009年サハリン韓人1世による「サハリン残留韓国・朝鮮人郵便貯金等補償請求訴訟」である。こうした訴訟に対する日本政府の見解は、韓国永住帰国者は日韓請求権協定で解決済みであるというものであった。しかし、当時サハリン韓人は、請求権協定の対象外とされていたのである。

このような訴訟にみられるように、サハリン韓人の問題が、永住帰国の問題だけでないことがわかる。例えば、2013年サハリン韓人団体代表団²⁶が来日し、日本政府に5項目からなる「要望書」²⁷を提出し、日本政府からの回答を求め

²⁶ サハリン州韓人協会、サハリン州韓人老人会、サハリン州韓人離散家族協会、サハリン二重徴用炭鉱夫被害者遺家族会の代表、顧問。1989年6月22日サハリン州韓人離散家族協会が創立された。韓人離散家族協会は、韓国訪問事業などに関わり、サハリン韓人の社会事業などを行っている。サハリン州韓人会は、1990年3月

28日創立され、在サハリン朝鮮人の権益保護及びその伸長と在サハリン朝鮮人のイメージを高める事業を行っている。

²⁷ 5項目とは、①95年に日本政府がサハリン韓人団体に約束したあらゆる条項を実行し、サハリン残留を希望する者たちに永住国者と同様の条件で生計支援を行う

た、その要望書は、サハリン韓人の郵便貯金、簡易保険等の未払いに関することや1944年8月11日付け日本政府決定によって二重徴用された炭鉱夫の名簿の資料及び公開など、日本の植民地支配の未精算の問題に関連するものであった。

今後の課題として、なぜ、ロシア名だけでなく朝鮮名を子どもにつけるのかといったことや朝鮮名をもっていることをサハリン韓人2世、3世はどのように考えているのかなど、サハリン韓人2世・3世のエスニシティの問題をさらに調査していきたい。

参考文献

- 『北東アジアのコリアン・ディアスポラ』小樽商科大学出版会、2012年。
小熊英二・姜尚中編『在日一世の記憶』集英社新書、2008年。
高木健一『戦後補償の論理』れんか書房新社、1994年。
大沼保昭『サハリン棄民』中公新書、1992年。
朴享柱『サハリンからのレポート』民涛社、1990年。
山本将文『写真報告 サハリンの韓国・朝鮮人』東方出版、1990年。
李炳律『サハリンに生きた朝鮮人』北海道新聞社、2008年。
アナトーリ・T・クージン『沿海州・サハリン 近い昔の話』凱風社、1998年。
藤川正夫「サハリン・ノート」2013年。
李月順「サハリン朝鮮人と民族教育」『年報 教育の境界』教育の境界研究会、2014年。
稚内市産業部サハリン課ホームページ

こと②サハリン韓人の郵便貯金、簡易保険等の問題において、日本側は法的対応という原則を立てているが、これ以上遅滞させることなく政治的にこの問題を解決し、貯金全額を投じて「サハリン韓人支援事業ファンド」をつくること③1944年8月11日付け日本政府決定により二重徴用された炭鉱夫の名簿と、日本本土まで到着できなかった者らの名簿を公開し、サハリン韓人側にこの資料を提供すること④1952年4月28日に発効されたサンフランシスコ条約によってサハリン韓人ら

の日本国籍は喪失したというが、これは法的に無効であるため、サハリン韓人永住帰国事業を継続しなければならないこと⑤サハリン韓人問題の解決において、パイロット計画の第二段階を実行するために、速やかに日本政府とサハリン韓人団体間で協議がなされるようにすること、である。金朋央「レポート サハリン韓人団体代表団 12年ぶり来日 日本政府に早期解決を訴える」参照。（コリアNGOセンター、No.33、2013年）

サハリン州住民の民族構成

「2010年全ロシア人口センサス」より

	「帰属する」とした人の数（人）	民族を明示した人の中での割合（％）
サハリン州総人口	497,973	
民族を明示した人の数	473,938	100,0
ロシア人	409,786	86,5
朝鮮人	24,993	5,3
ウクライナ人	12,136	2,6
タタール人	4,880	1,0
ベラルーシ人	2,994	0,6
ニヴヒ人	2,290	0,5
ウィルタ人	259	0,05
日本人	219	0,05
エヴェンキ人	209	0,04
ナナイ人	148	0,03
オロチ人	28	0,006
上記以外の民族とした人の数	15,996	3,3
民族を明示しなかった人の数	24,035	

*この調査は「自分では〇〇人であると思っている」という方式になっていて、飽くまでも「本人の主観」での民族帰属意識という結果になっている。

*ニヴヒ人、ウィルタ人、エヴェンキ人、ナナイ人、オロチ人はサハリンなどにかなり古くから住む「北方少数民族」である。

*日本人は、第2次大戦後に様々な事由で引揚げなかった人達や、その子孫。

*朝鮮人には、日本時代に入った人、生まれた人、その子孫になる人達の他、中央アジアから入った人達、北朝鮮から入った人達等が居る。

*1946年に“ソ連化”されて以降、色々な型でソ連全土の人達がサハリンに入り込んでいるため、サハリンはかなり多民族な地域である。

出所：稚内市産業部サハリン課ホームページ



シネゴルスク朝鮮民族学校（1948年）シネゴルスク炭鉱歴史博物館所蔵



朝鮮民族学校1952年当時。韓人文化センター資料室所蔵



韓人文化センター（2006年）開館



ユジノサハリン市郷土資料館（旧樺太庁）、扉は菊の御門が彫られている



『望郷の丘慰霊碑』 コルサコフ